

「文憲さん...

今、あなたの突然の旅立ちに、戸惑い、哀しみ、言葉を失っている多くの友人がいます。その一人として、この様に全く予期せぬ形で、お別れの言葉を申し上げることになろうとは、夢にも思いませんでした。せめてもう一度、酒を飲んでギター談義でもしたいね、と話してありましたのに残念でなりません。

思えば、文憲さんとの出会いもまた突然でした。三十数年前、私が莊村清志さんや江間常夫さんと共に講師を務めていた清里での講習会に、あなたは、ある一人の熱心な生徒として参加されたのです。

とても印象的な生徒さんで、今でも覚えています。最初にレッスンしたのはアルベニスのアストゥリアスでした。当時、ヨーロッパから帰国したばかりの私は、今思えば赤面の至りですが、かなり尖った厳しい口調であなたをレッスンした記憶があります。

しかし、本当に驚いたのは、その夜のパーティーでした。あの時、私の目の前にいたのは、昼間のレッスンの時とは別人のプロのギタリスト。その生命感に満ちた生き生きとしたタンゴの表現。私よりも遥かに長い時間をかけてプロとして歩んで来られた先輩ギタリストの逞しく堅牢な音楽家の姿がそこにはありました。

この人には教える事など何もないのに、いったい私は何をやっていたのだろうか？そんな思いで演奏を聴いたものです。

この出会いの時のギャップの大きさから、「クンパルシータの文憲さん」と私の中に、あなたの存在は大きく深く刻まれたのです。

とにかく人前で弾くことが好き、演奏を通して多くの人を喜ばせることが好き、そして何よりもギターを弾くことが好き。文憲さんの音楽はそういう根源的、普遍的な音楽への愛に溢れたものでした。とても説得力のある力強い音楽家でした。

その音楽への愛を貫かれた人生、その謙虚な姿勢と、温厚な人柄は、育てられた多くの門下生の中にも根付き、これから先も強く受け継がれて行くことでしょう。

文憲さん、ありがとうございました。あなたから演奏をする事の意味、喜びを教わりました。

かく言う私も演奏旅行の最中で、「偲ぶ会」への列席は叶いません。

ここに旅の空からお別れの言葉を送ります。

慎んで御冥福をお祈り致します。」

福田進一／台湾・台北市にて

平成29年9月17日